



TITLE:

# 変性意識状態に関する研究( Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

齋藤, 稔正

---

CITATION:

齋藤, 稔正. 変性意識状態に関する研究. 京都大学, 1976, 教育学博士

ISSUE DATE:

1976-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/221099>

RIGHT:

【 4 】

氏 名	齋 藤 稔 正 さいとうとしまさ
学位の種類	教 育 学 博 士
学位記番号	論 教 博 第 19 号
学位授与の日付	昭 和 51 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	変性意識状態に関する研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 梅 本 堯 夫 教 授 河 合 隼 雄 教 授 高 瀬 常 男

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、変性意識状態を客観的に把握して、その構造を分析するために、変性意識状態全般に適用可能な検査を作成してその信頼性、妥当性、有用性を吟味し、さらにその検査を用いて、人為的に誘起された変性意識状態と、自然に生起した変性意識状態とについて、それぞれの特徴と構造、および両者の関連性を検討することを目的としている。

まず序章においては、本論文でとりあげる四つの問題点についての考察がなされている。すなわち、1) 催眠や感覚遮断など、人為的に誘起された種々の変性意識状態は、相互にどのような関係をもつか。また自然に生起した種々の変性意識状態についても、相互にどのような関係があるのか。2) 人為的に誘起された変性意識状態と自然に生起した変性意識状態との間にはどのような関係があるのか。3) 両者を含めた全般的な変性意識状態に、共通した側面があるとしたら、それはどのような機能や構造をもつものか。4) またそのような共通した特徴の意識状態を経験しやすい人は、どのような人か、などである。

第二章から第三章にかけては、古代から現代に至るまでの、変性意識状態に関する研究を概観し、第四章において、変性意識状態の理論について、著者の基本的立場が述べられている。すなわち、人間がある行為を実現するまでの過程を、自動的制御機能をもった基礎体系、イメージによる行動の立案、吟味などを行う下位体系、最終的な意志決定を行う上位体系などよりなる、現実志向のための行動体系論を展開している。第五章では上述の理論にもとづいて、変性意識状態を実証的に把握するために、その数量化に関する研究を概観している。

第六章以下では、以上のような展望と理論にもとづいて作成した、60問よりなる変性意識状態 (ASC) 検査の検討が行われている。60問は、変性意識状態に関する10個のカテゴリー (空間感覚の喪失、時間感覚の喪失、主観一客観の差の感覚の喪失、言語感覚の喪失、自己感覚の喪失、恍惚感、注意集中、宇宙意識、受動性、一時性) よりなる。第七章でまず、240名の大学生を対象として、ASC検査の標準化を行い、再検査法と折半法によって、その信頼性を検討した後、第八章で妥当性の検討を行っている。妥当性

の検討は、10の小研究においてなされている。まず小研究Ⅰでは、上位下位群による項目分析を行って、その弁別性を確めた。小研究Ⅱでは、因子分析によって三つの因子を抽出している。第Ⅰ因子は、人為的変性意識状態および受動的トランスをあらわすもの、第Ⅱ因子は瞬時的忘我の因子、第Ⅲ因子は自発的変性意識状態および純粹トランスの因子とそれぞれ解釈された。

小研究Ⅲでは内容的妥当性を検討するために、類催眠現象を中心に作成された体験目録と ASC 検査との関連性が検討された。小研究Ⅳでは、イメージとの関連性を調べるため、イメージ検査と ASC 検査との相関を検討し、両者の間に有意の相関を見出している。小研究Ⅴでは、スタンフォード催眠感受性検査と、ASC 検査との間の有意な相関を見出し、小研究Ⅵではさらに実際に催眠トランスを経験させた後に ASC 検査の得点の変化を検討した。その結果、むしろ「注意集中」「宇宙識」「恍惚感」などにおいて、かつて経験した場合について評定した日常の ASC 検査得点よりも、催眠経験後の方が低くなっていることを見出した。

小研究Ⅶではバイオフィードバック技法を用い、同じくⅧでは vigilance task により得られた意識状態を ASC 検査によって調べ、それぞれ対照条件に比較して得点は低下するが、有意な相関のあることを見出している。小研究Ⅸでは、以上の催眠、バイオフィードバック、vigilance task 条件のほか、自然への没我体験、恋愛体験、宗教体験、芸術体験、読書への没入などの諸条件の被験者の ASC 得点をプロフィールにより比較検討し、それぞれの特徴を明らかにした。小研究Ⅹでは、事例研究を行っている。以上の小研究で ASC 検査の妥当性は、検証されたとしている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文において、執筆者が自ら作成した ASC 検査を用いて、これまでほとんど詳細な数量的分析がなされなかった変性意識状態全般の構造を解明しようとしたことは、重要な意味をもつものといえよう。これまでにも、催眠を中心にした一部の変性意識状態について、催眠感受性あるいは催眠深度を測定しようとして作成された検査尺度や、日常体験されることのある催眠類似現象についてその頻度を調べようとした検査があったが、変性意識状態全般を対象とした検査は執筆者が初めて作成したものである。その方法として、単純に質問紙を構成するのではなく、被験者にまず過去に経験した最も印象深い特別な体験と思われるものを想起させた後、それについて60の質問に答えさせて、その体験の特色を把握するという方法は独自のものといえよう。

この ASC 検査を用いて、変性意識状態を分析した結果、人為的変性意識状態および受動的トランスの因子、瞬時的忘我の因子、自発的変性意識状態および純粹トランスの因子の三因子が見出されたことは、変性意識状態全般の構造の理解に重要な意味をもつものであり、今後この領域の研究を行う場合に参考にせねばならない。また類催眠経験やイメージ経験との関連性も、ある程度把握されたが、実際の催眠体験やバイオフィードバック体験、あるいは vigilance task など変性意識状態を生起させると思われる手続きを行った後の ASC 検査得点がむしろ対照条件に比べて低いという興味ある知見を得ている。さらに、ASC 得点の高い個人が、性格検査では抑鬱性が高く、神経質な特徴を示し、むしろ不適応に近いものと思われる点を見出したことも重要な意味をもっている。

しかし執筆者も指摘しているように、催眠やバイオフィードバックなど、人為的な変性意識状態の ASC 得点の低い事実がどのような意味をもつかについてはまだ十分な分析がなされたとは言い難い。そして、その事実が、自然状態における最も印象の強かった変性意識状態を選んで、それについて質問に答えるという、執筆者の考案した ASC 検査の一般的施行条件を対照条件として比較していることと、どのような関連性があるかについて、必ずしも十分な検討がなされていない。また ASC 検査の10カテゴリーの命名にもかなり問題は残っており、特に「宇宙識」など定義のあいまいなものも含まれている。

このような難点はあるにせよ、変性意識状態の科学的研究への道を開拓したものとしてこの論文の意義は重要である。またこの研究は人格の成長や適応と関連する面が少からずあり、その点で教育心理学的な意義も大きい。

よって、本論文は教育学博士の学位論文として価値あるものと認める。